

CONTENTS

特集／芸術文化支援の新たな潮流

巻頭言	例外ばかり	曾野綾子	4
座談会	芸術支援の在り方を探る 川本雄三／下八川共祐／太刀川瑠璃子／山田怜／大橋敏博(司会)		6
小論文	「アーツプラン21」と芸術文化支援	永井多恵子	12
特別支援団体の紹介	東京交響楽団	金山茂人	14
	牧阿佐美バレエ団	三谷恭三	15
	アゴラ企画・青年団	平田オリザ	16
解説	芸術創造活動に対する支援について	芸術文化課支援推進室	17

連載

● 随想／いつの時代も「憎きもの」	山口仲美	20
● 地域からの文化発信／博物館・美術館紹介⑩	観峯館	22
● 後世に残そう我が県の文化財⑩／高知県 豊楽寺薬師堂、土佐のオナガドリ		25
● 芸術文化活動でまちづくり⑩ 富山県高岡市「越中万葉夢幻譚」		28
● 著作権法講座Q&A／20		31

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

・第20回 文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「歌舞伎——変遷と展望——」	32
・第43回 日本伝統工芸展	33
・平成8年度(第30回)現代美術選抜展	36
・第20回 全国高等学校総合文化祭開催	37

イベント案内

・東京国立博物館「法隆寺献納宝物」	39	・12月の国立劇場	45
・「第46回 全国民俗芸能大会」	40	・芸術文化振興基金ニュース	46
・京都国立近代美術館「プロジェクト・フォー・サバイバル」	41	・表紙解説／編集後記	48
・国立国際美術館「スーザン・ローゼンバーク」	42		
・国立国際美術館「90年代の韓国美術から」	43		
・「第14回 伝統工芸人形展」	44		



作家／財団会長
日本 曾野綾子

例外ばかり

巻頭言

芸術と文化という言葉を一つにしているかどうかが大きく考えの分かれるところだろうが、私たち作家はよく、芸術家の経済的な生活について、半分冗談のような会話を交わすことがある。

それは作家にとって、どんな状態が、いい作品を生み出すのに適しているか、という問題である。絵画や音楽の場合だと、芸術家は、物心両面のバトロロが必ずあった方がいいような気がする。私はいつかヴァチカン宮殿の奥で、一種の唐草模様のような木と、花鳥を描いた愛らしい壁画のある小部屋を見たことがある。いささか記憶は曖昧なのだけれど、それはラファエルが当時の教皇の姪を好きになって、彼女に会いたさにこの仕事をわざとやらだら続けた、なかなか仕上げなかったと言われる部屋なのだろう。

私の記憶違いにしても、伝説にしても、大いにありそうな話である。イタリヤでは、王も貴族も、教皇も権威卿も、芸術のバトロロであった。今春、私はウズベキスタンのタシケントでコンセルバトワールを訪問した。国中から天才的な音楽家が集まる優秀な音楽院である。そこでたくさんの方々の素晴らしい演奏を聴いたが、中には技術はあるのに、実に質素なヴァイオリンを弾いている青年もいて、気の毒になった。日本では、初心者でも、百万円くらいの楽器を持っているのはざらだそうで、せめてそれくらいの楽器を買った。与できたらというのが、その時訪問した日本人の感想であった。

音楽家の楽器は、どうしてもある程度いいものを持た

せなければならぬ。それは自明の理である。しかし小説家となつたらどうだろうか。作家になるにはどうしたらいいか、という質問をよく受ける。宇野浩二はそれを「ウン、タン、コン」(運、鈍、根)と表現した。作家は適当に頭が悪くて、しかし根気があるのがよろしい。そして何より運がよくなければならぬ。秀才など、何の役にたたない、ということだ。

しかし私はそれに更にもう少し他の条件を付け加えてもいいのではないかと、思う時もある。たとえば、「ピン、エン、ビョウ」(貧、怨、病)である。もちろんこれらは、本来はどれも願ひ下げにしたいものばかりだ。しかし少なくとも私は運命に私怨があつたから作家になつた。戦争の体験も大いに関係がある。幸福より悲しみがテーマになり易いから、戦争は少なくとも作家には偉大な意味を持っている。私は健康だったが、病気が作品を完成させた例はいくらでもある。貧乏もまた同じだ。

作家を幸せにしたら、少なくとも、私のような怠け者は決して書かなくなるだろう。いや、書かないなら、別に書かなくなつていいのだ。作家などいてもいなくても、一國の政治にも経済にも、ほとんど何の影響もない……などと、それから思ひは延々と続いてなかなか結論が出ない。だから今のところ、経済的に恵まれている方がいい芸術の分野と、それでもなさそう分野がある、というようなことでお茶を濁している。

芸術文化支援に関して、私も日本財団の会長に就任し

てからは、嫌でも真剣に考えざるを得なくなった。日本財団には公益・福祉事業部というのがあり、平成八年度には体育関係に約三億円、文教関係に約二億円の予算を計上している。文教関係の予算の中には、音楽から演劇まで広範囲のものが含まれるが、これは将来もっと増やす方向にしたいと考えている。しかも総花的に、どの団体にも一律に同じ額を振り撒くのではなく、重点的に、大きな仕事を残せるプロジェクトに振り当てるのが、民間の使命だろうと考えている。

それは官と民という立場の違いを考えれば当然のことであらうと思われる。官はどこにも、慎重に、平等に、公平に与えねばならない。それが重要な選択の基準である。しかし民は別の原則に従う自由を持っている。官と民は、一つの車の両輪である。一つ欠けても車はうまく走らない。

民は、というより少なくとも日本財団では、私たちは一つの合意に到達している。それは芸術文化の支援は、自由に、重点的に、集中して、素早く、前例は無視して、常に新しい道を切り開くべく冒険を恐れてはならない、ということである。これは明らかに官の選択と、一見正反対の立場を採るものである。

しかし立場の違いはあれ、官と民は、どちらも相手があつてこそ、実質的な、実行きの深い日本が作れるのだということに常に認識しなければならぬし、お互いに尊敬を持って評価し合うべきだろう。

一般的には芸術文化団体は経済的な支援を与えられるべきだが、時々私の中ではそうでもない、と思つて

いるのである。人間というものは、ほんとうにやりたい時には、何とかして死に物狂いでその方途を見つけたものだ。

大学生の時、私は既に小説を書いていて、それを同人雑誌に発表することが作家修行の一つだと思つていたが、その雑誌の費用を、他の同人たちと共に捻出するのが大変だった。そのお金を得るために、私は民放のラジオの聴取者文芸の時間に、短編小説をせっせと投稿した。局の方でも同じ名前の人の作品をそうそういつも採用するわけにはいかないだろう。それで私は友だちの名前から母の友だちの名前まで借りることにした。全くでたらめな名前をつけると、原稿料が受け取れないから縁故を利用する他はなかつたのである。

当時、一〇枚の短編を書いて投稿し、採用されると四八〇〇円だかの原稿料が貰えた。そのお金を溜めて、私は同人雑誌の費用にしたのだ。その頃の私は、作家として名前を覚えられるよりも、同人雑誌を出すお金が欲しかったのだから、単純なものである。

しかしその時、私はお金欲しさに短編を書き続けたおかげで、私は短編小説の書き方を体で覚えたのである。つまりお金がなかつたからこそ、私の文学はよくなったのである。

芸術文化のような人間の分野に対する助成には、常に一応のルールしかないという恐れを持つていけば、その時々に応じて柔軟な判断ができる。大切なのは、恐れを知つて、そのことに関する行政的なやり方が完全なものだ、と思わないことである。

芸術文化支援の新たな潮流

特集

特集

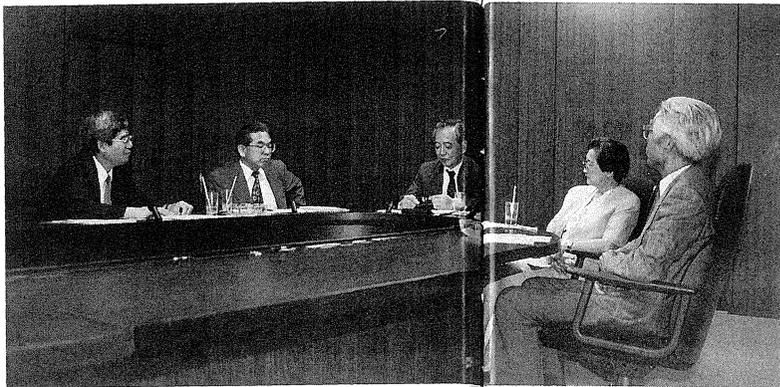
最近の芸術文化活動支援をめぐる状況

大橋 本日は、我が国の芸術活動に対する芸術支援の在り方を探るということで、お話しをいただきたいと思えます。

文化庁では、今年度、これまでのいくつかの事業を再編成して、「アートプラン21」という新しい支援システムを創設しました。これによって、芸術団体への支援は、予算的には約一〇億円の増加となりました。

これも、物の豊かさより心の豊かさを求める動きが高まってきたことや、芸術文化は我が国がよって立つ基盤だということが理解され始めたという世の中の動きがバックにあつたからだと思います。

このように、芸術文化活動をめぐる状況は次第に変化してきていると思いますが、まず、実際に芸術活動をしておられる立場から、現状等についてお話をいただければと思います。



座談会

芸術支援の在り方を探る

日本オペラ振興会の下八川さん、いかがでしょうか。

下八川 私ども六〇周年をおとし迎えたんですが、世の中も不景気になってきて、このままですと、とても大規模なオペラはできないということ、小型化しようという方針でいたんです。しかし、今年度「アートプラン21」ができたということもあって、演目数は減りましたが、規模的には充実したものとすることができました。

今までお客様の伸びが少しづつは上向いていたんですが、今年になってから急に上向きまして、二〇パーセントぐらいの伸びが出てきました。

初日に来られた方が、よかったですといって三日間続けて来られるようなこともあります。

今まで我慢して苦労してきた効果が一挙に出てきたという気がしています。

大橋 スター・ダンサーズ・バレエ団の太刀

評論家

日本オペラ振興会常任理事
スター・ダンサーズ・バレエ団
事務理事

三菱信託芸術文化財団事務局長

文化庁芸術文化課長

川本 雄三

下八川 共祐

太刀川 瑠璃子

山田 怜

大橋 敏博

出席者

司会

民生活に必要なものだという認識がかなり浸透してきたのではないかと思います。

終戦直後、芸術の祭典の花を咲かせることにより、国民生活に再建の希望と勇気を送り込むことをねらいとして国が始めたのが芸術祭だったわけですが、戦後五〇年たちまして、今度は「アートプラン21」というまさに二一世紀をにらんだプランが浮上してきた。また、新しい国立劇場も間もなくできます。

二一世紀へ向けてのいろいろな布石ができつつあるように感じます。この布石が線になり、やがて網の目ようになって、芸術文化活動に対する社会的な基盤がだんだんにつくり上げられていけばいいと思います。

大橋 そういう方向にいくことを願って、私も取り組んでいるところです。

川本 演劇について言いますと、音楽や舞踊に比べて、劇団のこれまでの歴史などから、社会における位置付けがはっきりしていません。それがようやく、音楽や舞踊と並んで、「アートプラン21」の重点支援の対象に選ばれるようなところまでできた。このことを、演劇を中心に取材や評論を通して芸術文化に関わってきた私自身、とても喜んでいます。

大橋 今お話が出ましたが、「アートプラン21」の事業の一つに、我が国の芸術水準向上の牽引力となることが期待される芸術団体に

の意味では入りやすいジャンルだと思うんです。ただ、見ず嫌い、食わず嫌いの方が多くいらつしやるんだらうと思います。バレエを見るということが多いわけですね。また、バレエというのは外国で生まれたものなので、外国のバレエ団の公演は見るけれど、日本のバレエ団の公演は見ないという考えも根強かった。

しかし、今年できた「アートプラン21」の中に舞踊も明確に位置付けていただきました。このことをバレエ界全体としても喜んで

います。

大橋 川本さん、評論家としてごらんになつ



下八川共祐氏

特集

対して、年間を通じて支援する「芸術創造特別支援事業」があります。

下八川 私たちも特別支援団体としていたいて、見に来てくださった方に感動して帰っていたかなければならないとの責任をすごく感じますし、お客様の反応も敏感に感じるようになりました。

太刀川 私どもも、すごく責任を感じますね。国からいただくお金が大きくなればなるほど、いいものをつくる責任も大きく感じます。

川本 この間、劇団の集まりでいろいろ話を聞きましたら、やっぱり同じように責任を感じていらつしやる。「アーツプラン21」になりますと、年間を通しての助成ですから、その責任の重大さを感じるだけでなく、期待に応えようという前向きな姿勢が非常に強くなくてきています。

また、助成をいただく以上、同じことの繰

担は、年間でも一二万円ですから、それほど大きくない。しかし、全体では、一〇〇社集まると一、二〇〇万円になる。一つの地域で一、二〇〇万円の支援をするとなれば、だいぶ大きなことができる。このように、各地域で創意工夫をこらしておられる地域メセナが、今後どんどん広がっていくのではないかと感じます。非常にありがたいお話と感

山田 税制の面で言えば、特定公益増進法人になると、免税の枠が倍になります。今、特定公益増進法人になるのかなり大変な手続きが必要ですが、認定の手続きをもっと簡素化していただくことはできないんでしょうか。そうすれば、お金の回り方もだいぶ違ってくるのではないかと思います。

大橋 手続きを簡素化することは大切で、今後さらに努力していきたいと思っております。また、しばらく前に、社団法人企業メセナ協議会が認定をした活動については、その活動に対する寄附金は税制上の優遇措置を受けることができるという、特定公益増進法人と同じような効果のあるシステムができました。これらを積極的に活用していただくのも一つの方法だと思います。

川本 おそらく個人としても、寄附をしたいという希望が、これからはいろいろ出てくるだろうと思いますが、個人の場合も税制的に



川本雄三氏

優遇される措置が講じられることが必要だと感じます。

山田 そうですね。日本も企業が芸術活動にお金を出す風土がやっとできてきたと思えます。あとは、個人が芸術活動にお金を出しやすい環境づくりをしていくことが必要ではないでしょうか。

太刀川 アメリカのお話をうかがっていますと、とても税制的に恵まれて寄附しやすい状況のようですね。ただ、現在は緊縮になっているようですが。

大橋 ヨーロッパは国や地方公共団体が中心となって支援をするタイプ、アメリカは民間が活動を支えるタイプ、日本は公的な支援があり、民間の支援があるという中間的なタイプだろうと思います。

川本 戦前からのカーネギーやフォードなど、アメリカの支援財団は、相当に規模が大きいようですね。

大橋 そうですね。国が直接お金を出すというよりも、税制上の優遇措置を講じるなどして、お金がかたく回るようなシステムを作っているように思います。

川本 ところで、演劇団体は音楽や舞踊の分野と比べて非常にたくさんあります。公益法人であったり、小さな株式会社であったり、任意団体であったりして、一口に劇団と言っても非常にさまざまですが、公的支援なり民

多様な支援の重要性

大橋 芸術文化支援では、財政的な支援はもちろん重要ですが、それ以外にもさまざまな支援のカタチがあるかと思えます。

今後、こんな支援があったらといったお話をいただければと思います。



太刀川瑠璃子氏

に役立つのではないかと自負しています。

大橋 最近の低金利の状況は、財団の方々にとっては、かなり厳しいものがあるようですね。

山田 そのとおりです。財団の担当者が会うと話がすぐそこへいってしまいうぐらい、一番頭の痛い問題です。企業が出資元の財団ですと、母体企業に追加の支援を依頼しているケースも結構ありますので、金利の低下がストレートに助成金の減にはつながってはいないんですが、こういう状況が続くと、なかなかしんどいかなという感じがします。

太刀川 ある地方の中小企業の主催者の集まりで話をさせていただいた時に、皆さん、支援したい気持ちがとても強いと言ってくれました。民間における財政的支援を活発にするためには、小さい企業にとっても寄附しやすい税制上の仕組みにしていいただく必要があるのではないのでしょうか。

大橋 メセナ活動も、地域の中小企業に相当広がってきています。このような地域メセナが、もう一〇ヶ所を超え、一度集まって情報交換をしたらどうかということとなり、今年三月に連絡会が発足しました。

地域ごとにいろいろな方法を工夫されています。例えば、月一万円の会費で一〇〇社が支援している例があります。一つの企業の負

企業メセナなどの芸術支援

り返し、名作路線みたいなことにならないよう、もう一步芸術文化を進めていく実験的なことも必要になってきますよね。特に重点支援の意味はそういうところにもあるだろうと思います。二一世紀へ向けて、もっと積極的なことをやらなければならないという責任感を、劇団は非常に大きく持っているような気がいたしますね。

大橋 民間の芸術支援活動(メセナ)が芸術文化活動を支える上で非常に重要な役割を果たしておられます。山田さんは、いわゆる助成型財団の取りまとめをしていらつしやいますが、現状はいかがでしょう。

山田 昭和六二年頃から、民間の企業型財団の設立が相次ぎました。このような財団で芸術文化助成財団協議会を組織していますが、現在、二二財団が加盟しています。

助成対象としているジャンルは芸術活動全般ですが、音楽と美術が多いようです。もちろん、舞踊や演劇を対象としている財団もあります。

最近の助成の実績について数字をまとめてみたところ、平成六年度で二二財団あわせて一億円強です。これは公的な支援に比べれば微々たるものかもしれませんが、個々の芸術家、芸術団体の方々にとっては、それなり

大橋 今後、こんな点は改善したらよいと感じておられることなどがありましたら、お聞かせいただけますか。

太刀川 意識改革みたいなものを地道にやっていくことが、今の日本にはとても大切ですね。他人のためにお金を使うことの喜びを日本人は一般的に知らないですね。そういう意識改革が広がっていくことが何より重要なのではないのでしょうか。

周りを見ましても、親がお金を出すのはあくまで子どものために出すんですね。自分の子どもがバレエをやっているからお金を出す



大橋課長

いろいろな方々に入っていたら、その方々がいろいろなところと結びつけてくださり、そこからさらに波及効果が及んでいきます。

今後の課題

大橋 場所の支援の話が出ましたが、支援組織づくりなどを各芸術団体が工夫しておられるようですが、

太刀川 まだこれから実行の段階なんです。ボランティア活動が活発になる必要があるのかなと考えています。そういう気持ちで日本人にはとても少ないように思いますが、それが芸術を支える基本ではないでしょうか。

大橋 そうですね、裏の仕事を支えていただくことを打ち出してみようかと思っています。どの程度、そういう方が集まるかわかりませんが、その代わり、そういう方たちに舞台稽古を開放したり、ダンサーとの交流などをしていこうかと考えています。

大橋 支持して、一緒にやっていくことの喜びみたいなものです。支える人が多くなれば、結果として観客も増えることにつながるでしょう。いろいろなかたちで支援してもらえると、非常に大きなことですね。

太刀川 練習場にお招きして、ダンサーが汗

下八川 オペラで一番難しい点は、練習場と本番会場の確保の問題です。ゲネプロを十分に行うことが必要ですし、また、主役の歌手は毎日歌えないので、一日ないし二日あけなければなりません。会場に何とか無理を言っただけで、調整していただくようにしていますが、会場の確保は非常に大きな課題です。幸い、ホールのほうでもだんだんオペラの大変さをご理解いただけるようになって、今はいい方向に動いています。

川本 演劇団体にとっても、恒常的に稽古ができるような場所の確保が、きわめて大きな課題です。技術向上のためには公共的な施設を安く借りられるといった支援があるといいと思います。

下八川 オペラの場合、舞台装置を保管するための倉庫も大きな課題です。以前、ある民間会社が倉庫を貸してくださって、「アイーダ」という大型の作品の道具を無料でお預かりいただくことができたんです。一年半ぐらいい預かっていただきましたから、それだけでも何千万円の支援をしていただいたことになりました。

山田 確かに、企業型財団ですと、母体企業との関係プレーが随所にあります。今、貸倉庫のお話がありましたけれども、そのほかにも稽古場の提供ということも聞いております。私どもの財団の話になつて恐縮ですが、

が、その子がバレエをやめたら、それで終わりというケースが圧倒的です。また、企業も外国のバレエ団の公演にはお金をお出しになつても、日本のバレエ団の公演にはなかなか出してくださらない傾向があります。

最近、あるバレエ公演をしました時に、ある会社が、五千万円出してくださいました。社長が公演にいらして、観客が涙を流して感動している姿をごらんになって、「ああ、いいことをした」と言ってお帰りになつたんです。私もお応えできてよかつたと思いました。

お金を出す側とそれを受けて立つ側の両方の連帯責任みたいなものがずつつながつていくことが理想的だと思います。

社会全体として「芸術文化にお金を使うべきだ」となる本当にいいと思います。「アーツプラン21」のできた今この時に、国民にとって芸術文化は食事と同じように心の糧として絶対必要なんだ、そう思わない人は恥ずかしいんだというくらい状況になるといいと思いますし、行政も芸術団体も、そのために積極的に活動をしていくべきではないでしょうか。

川本 ハンディキャップを持った方たち、高齢者、また芸術関係の勉強をしている若い人、あるいは青少年に低廉な鑑賞機会を与えるような助成策ができるいいと思います。

下八川 確かに、高齢者の方とか、障害を持

財団の事務所にはささやかな会議室がありません。空いている限り芸術家、芸術団体に無料で提供させていただいています。また、母体企業の施設に体育館みたいなものがあるのですが、これをオペラ団体の練習場として、ご希望があれば、空いている限りお貸しするということもしています。

大橋 場所の支援の話が出ましたが、支援組織づくりなどを各芸術団体が工夫しておられるようですが、

太刀川 まだこれから実行の段階なんです。ボランティア活動が活発になる必要があるのかなと考えています。そういう気持ちで日本人にはとても少ないように思いますが、それが芸術を支える基本ではないでしょうか。

大橋 支持して、一緒にやっていくことの喜びみたいなものです。支える人が多くなれば、結果として観客も増えることにつながるでしょう。いろいろなかたちで支援してもらえると、非常に大きなことですね。

太刀川 練習場にお招きして、ダンサーが汗



山田 怜氏

つた方々のための対策は重要ですね。

それから、若い人たちは将来の観客でもありませんから、若いうちから興味をもつてもらおうようにすることが重要だと思います。高校生にゲネプロを見せたらおもしろいことがあつてしまいが、結局できなかった。これから新国立劇場ができましたら、中学生ぐらいいから、オペラ、バレエ、オーケストラに親しめるような取組みをぜひお願いしたいですね。

太刀川 年齢によって、見るのが適当な演目があるわけですね。この年齢の子どもにはこういうものを見せるといつた長期計画を立てることが重要だと思います。楽しさの中で、その芸術を好きになるという環境づくりが重要だと思います。そういうことはなかなか民間ではできませんから、公的な立場で取り組んでくださるといいですね。

下八川 いじめの問題も、子どもたちがいじめ居居を見せて感動させていたら、起きないんじゃないかと思うんです。よく音楽鑑賞教室で学校に行きますので、騒いでいる子どもたちも、オペラをやると必ず静かになって涙をポロポロ流しながら見ている。小さいときから芸術に親しませる重要性を実感します。

大橋 残念ですが、時間がまいました。本日はたくさんのお話をいただきました。誠にありがとうございました。

を流してやっているのを見ると、とても魅力がある。楽しみが倍になる。」とおっしゃつてくださる。会社へ呼んでいただいてお話をするとき、ちょっとそこで実演をつけるだけでも、会場にいる方たちが、「ああ、こういうことをするのか」と感心してくださる。本来は劇場へ来て、座って見ていただくものではないですけれども、そういう種まき、耕す時期がもう少しあつてもいいのかなと思つたりしています。

大橋 実際に舞台をつくらせている方とお話をしていると、見方が変わってきて、おもしろさかなり違ってきますね。それは本当は、相当大きなお話ではないでしょうか。

下八川 私も、これからの芸術文化活動の発展のためには、ボランティアの存在が重要だと思います。ボランティアというかたちでい

夏、ニューヨークに観劇の旅に出た。セントラル・パークでは恒例のNY公共劇場のシエクスピア公演をはじめとした無料公演が約二か月半続き、ふだん舞台上に縁遠い人々にも楽しみながら人生を感じさせるプログラムが提供されていた。ミュージカルやオペラが目的でこのマンハッタンを訪ねる日本人は年間二万人、日本では満たされない舞台芸術へのニーズをこの地で満たしているという。今年度文化庁が打ち出した「アーツプラン21」は、こうした鑑賞ニーズに応え、国内の舞台芸術の水準をあげる、思い切った重点支援策といえるだろう。

小論文

「アーツプラン21」と芸術文化支援



NHK解説委員
永井多恵子

鑑賞ニーズの増加と「アーツプラン21」

日本国内でもこの二〇年間に、公演数でみて演劇が一・五倍、音楽は四倍近く、鑑賞ニーズがあがってきている。海外からの来日公演をきっかけに、あるいは海外生活を経て、鑑賞が日常化したこともその一因であろう。近年の来日公演の中では、印象的な舞台としてドイツ・オパー・ベルリンのワトグナー「リング」、テアトル・ド・コンプリシテというイギリスの劇団の「ルーシー・キャプロルの三つの人生」も衝撃的だった。前者は前衛的な演出がよく知られているが、後者もルッコクの演技システムを採り入れ、樹木から牛や馬まで全部俳優が演じざるおもしろさ、表現というものの可能性を再認識させる舞台だった。イギリス・マンチェスターで幕を開けイギリス全土はもちろん、ヨーロッパ、南アフリカ、日本、オーストラリア、この夏はリンカーン・センターと国際的なツアーが行われている。財政援助はイギリス芸術評議会（初代会長／メイナード・ケインズ）とロンドン委員会。

芸術家の才能、努力はもちろんだが、人の育成に関連する事業は公共の息長い援助の歴史あつてこそ、と思う。

その援助額を仮に文化予算（内容は国によって異なる）に置き換えてみると、イギリス一、九三億円、フランス二、九六五億円、ド

イツー、〇五四億円、日本は一桁違うが平成八年度は七五〇億円と、ようやく一般会計の〇・一パーセントにのつた。そしてその目玉が「アーツプラン21」——二世紀への芸術支援計画の三二億円。この中で特に注目されるのが芸術創造特別支援。芸術団体のトップクラス一五を選び、原則として三年間、総合的継続的に支援しようというものである。

なぜ、支援が必要なのか

こう書くと、いい舞台をつくれれば必ず客は入るはず、援助は必要なし！ という類の質問を浴びる。この批判の根底には「文化等というものは、好きなものに勝手にやらせておけばいい。あるいは文化は主観的なものであつて、特に政府が口出しすべきではない」という論も混じる。しかし、この産業社会の中で舞台芸術の成り立ちは一般事業とはいささか異なることに注意を払いたい。普通、事業は市場の売れ筋を探り、それに合わせて物、サービスを提供する。（もちろん、その種の興行も存在するし、それが悪いわけではない）しかし、芸術家の場合は「自分が創りたいから創る」側面が強い。売れるか売れないかは結果なのである。また、結果が時間とマッチしない場合が多い。モディリアニの絵が評価され高い値段で画商間を流通するようになったのは、画家の死後半世紀たった頃なのだ。

ここに芸術家の苦界が生ずる。

バレエの公演経費をみてみよう。総経費を一〇〇として入場料・プログラム収入が半分（五三・五パーセント）、助成金が一七パーセントあるが、しかし自己負担（赤字）が約三〇パーセント（我が国の文化と文化行政）昭和六三年、文化庁）。一方、舞踊家の年間行動日数をみると、年間二〇日のステージ数に稽古八三日と企画振付に五七日（芸術協調査）、つまり一日のステージのために七倍の時間（無償）をかけている。そして一二五日の教授活動は赤字補填と生活費に充てられる。もし援助が増えれば、アーティストとしての活動日が増え企画にゆとりが生まれ、結果としてよい舞台が生まれる条件（必ずしも結果ではないが）が整備されるということになる。もちろん、アーティストの活動環境の改善は他に流れる人材を吸収する可能性を高めることだろう。

審査への注文

アーティスト達の期待の高まる中、審査には専門家による委員会が文化庁に構成され、過去の実績、国際的活動、企画の獨創性、活動

の継続性等を基準に審査が行われた。この間最も応募数が多かった演劇部門からは、援助プランの趣旨や審査の基準等について問題提起が行われ、趣旨文言の訂正、審査員の事前公表等の経緯を持った。審査員が評論家ばかりでいいのか、現場のアーティストや製作者がかかわるのがいいのかについても議論をよんだ。審査基準はあつたとしても判断は結局（人）による。先輩団、欧米の審査事務局によれば審査はほとんど現場の人間で行うという。たとえばイギリス芸術評議会審査員には、ミュージカルの製作者で著名なマッキントッシュやアッテンボロー等の名前があるし、アメリカの経験では実際に現場に携わっている者がまだしもよく判断できると言う。日本では現場のアーティスト達が自分以外の舞台をあまり見ない（見る暇がない）のは事実であるし、自分のところも喉から手が出る状態なのに、公平でいられるか、あるいは萎縮してしまわないか、いずれにしろ誰がこの労苦を引き受けるのが適当なのかは研究課題である。芸術文化の審査システムは未成熟であり、時間をかけて今後も実りのある議論をすべきだと思

う。

「アーツプラン21」を含めて芸術支援全体について言えば、「公演事業」だけの支援では、もはやいい舞台が生まれ、ということだ。作家や演出家への創作支援、俳優の訓練、つ

芸術文化団体の役割

最後に、援助に期待する芸術団体には社会的役割が生ずることを述べたい。もちろん、魅力ある舞台をつくるのが究極の目的だが、同時にプロとしての能力を一般の人たちにも還元してもらいたいのである。音楽や舞踊、演劇はプロのものだけではない。一般の人にとつても表現することは人間の根源的な衝動欲求だと思ふ。人と人とのコミュニケーションの高度の手段として舞台芸術の「身体性」の回復が必要だと思ふからである。

芸術には自分のためという「利己的」な部分と、結果として他人に喜びを与える「利他的」な面と、二つの側面を有する。この後者をどれだけ意識した活動が出てくるのか、芸術団体としての枠に閉じこもらず一般の人々とも接点を持ち、二一世紀に人々の心の飢えを満たす舞台をつくりあげてくれることを期待したい。

特集

文化庁は今までも芸術文化振興のために大変尽力されてきたが、一九九六年、新事業として「アーツプラン21」を創設した。それは国際的な芸術交流の推進、芸術家の育成、そして舞台芸術振興の支援を目的としているが、さらに一歩踏み込んでその中に特定の芸術団体への助成金を集中配分する「芸術創造特別支援事業」が新しく設置された。

五月に助成団体が発表されたが、牧阿佐美バレエ団も舞踊部門で他の三団体とともにその指名を受けた。この採決基準は過去三年間の活動実績と今後三年間の事業計画から総合的に判断されるということである。牧阿佐美バレエ団がこの助成団体に選ばれたことは今日までの私どもの努力と公演活動が国によって評価されたことを意味しており、大変ありがたいことである。この「芸術創造特別支援事業」の対象団体となることにより、今後三年間の継続支援を受ける資格を与えられたわけだが、このこともバレエ団が活動方針を近い将来のある一定期間にわたって打ち出せるという点において、事業計画をより一層ダイナミックに立てることが可能となった。そして私どもを芸術家としてさらに鼓舞し、チャレンジ精神をいやがうえにも旺盛にするものである。

国からこのように認められ、その支援を受けるといことは、喜んでいただけではすまされない。やはりその期待に応え、国の内外

幾多の存亡の危機に直面したが、昭和五五年に財団法人が再許可されるに至った。

昭和六三年、縁あって、(株)すかいらーくから強力な資金援助が約束され、長年の懸念であった財政基盤確立に向けて大きく前進をした。これを機に楽団の活動をより積極的にアピールすることを心がけ、舞台上演形式によるオペラの新境地を開拓した。

これらの演奏が評価されたのか、平成元年「音楽之友社賞」、平成四年「京都音楽賞大賞」、平成六年秋山和慶音楽監督就任三〇周年と定期演奏会四〇〇回を記念して行ったシェーンベルクの《モーゼとアロン》(演奏会形式、邦人初演)が予想外の評価を受け、その成果に対して平成七年に「毎日芸術賞」を秋山音楽監督と共に受賞したのに続き、本年一月、モービル音楽賞の受賞が決定している。

楽団創立五〇周年を記念して行ったヨーロッパ主要都市公演は、改めて日本のオーケストラのレベルの確かさをアピールし各地で絶賛された。このツアーの最中に「アーツプラン21」の特別支援団体の一つに選ばれたという朗報が入り二重の喜びとなる。採択理由は、長年にわたり音楽監督秋山和慶と共に安定した実力を培い、さらに演奏水準を高めていくこととする意欲的な姿勢と、創立当初より内外の新しい作品に積極的に取り組んでおり、今後一層の活躍が期待されるというもの。

当楽団が創立五〇周年を迎えている今、長

特別支援団体の紹介

牧阿佐美バレエ団



芸術監督 三谷 恭三

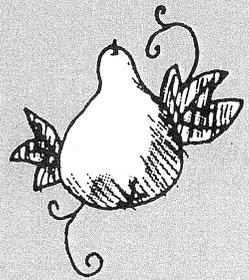
に對しても、今まで以上の成果をあげなければならぬという点で、責任と使命を改めて覚えるものである。

牧阿佐美バレエ団は、一九三三年に故橋秋子によって創設された橋バレエ研究所を母体とし、一九五六年、橋秋子と牧阿佐美により結成され、すでに四〇年が経つ。故橋秋子は非常なる進取の精神の持ち主であったが、その精神は今日にも受け継がれ、牧阿佐美バレエ団もその歴史の中で数々の「日本初」に挑戦し続けている。

毎年のように外国より著名な振付家、美術家、ダンサーを、そして作品によっては音楽

指揮者までも多く招聘し、新作を発表し続け、常に日本のバレエ界に新風を吹き込んでいる。外国との交流という点では、私どもの力の世界に問う海外公演も重要な位置を占める。特に記憶に残るのは、旧ソ連文化省より正式招待を受け、一ヶ月公演で大きな成果を納めたことである。今後も積極的に取り組んでいきたい事業の一つである。

さて、伝統的に全幕物ではすでに高い評価を得ているが、近年特に「ダンス・ヴァンティアン」をスタートさせて以来、コンサート形式の公演でも新しい面を打ち出し、各方面より注目を集めている。今後も古典芸術としてのバレエのあり方と、時代の変化を見据えつつ、全幕物とコンサートを二本柱に、外国芸術家、外国バレエ団との共同制作にも一層力を入れ、より質の高い作品を提供することにより、文化庁の期待に応えたい。文化国家としての日本の一翼を多少なりとも担い、与えられた使命を果たすことができれば幸いである。



特別支援団体の紹介

東京交響楽団

楽団長 金山茂人



昭和二一年に東京交響楽団の前身である東宝交響楽団が誕生した。楽団名が示すように映画の東宝傘下のオーケストラだったが、昭和二五年には東宝を離れ、名称も東京交響楽団と改称した。当時、毎回の定期演奏会をはじめとして内外の作品の紹介を積極的に行い、その結果意外な作品が当楽団の本邦初演となつている。すなわち、《白鳥の湖》、《タンホイザー》、《ドン・ジョヴァンニ》、《ヴィヴァルディ(四季)》、《シオスタコフヴィチャプロコフィエフ等の数々のシンフォニーetc.》：その数、百数十曲に及ぶ。また、当時珍しかった一流アーティストとの

協演も多く、これらの功績に對して、昭和二〇年代後半から三〇年代にかけて、「文部大臣賞」、「毎日音楽賞」を受賞している。

しかし、昭和三九年に不況の影響をもちに受け、財団法人の解散が余儀なくされるなど

幾多の存亡の危機に直面したが、昭和五五年に財団法人が再許可されるに至った。

昭和六三年、縁あって、(株)すかいらーくから強力な資金援助が約束され、長年の懸念であった財政基盤確立に向けて大きく前進をした。これを機に楽団の活動をより積極的にアピールすることを心がけ、舞台上演形式によるオペラの新境地を開拓した。

これらの演奏が評価されたのか、平成元年「音楽之友社賞」、平成四年「京都音楽賞大賞」、平成六年秋山和慶音楽監督就任三〇周年と定期演奏会四〇〇回を記念して行ったシェーンベルクの《モーゼとアロン》(演奏会形式、邦人初演)が予想外の評価を受け、その成果に対して平成七年に「毎日芸術賞」を秋山音楽監督と共に受賞したのに続き、本年一月、モービル音楽賞の受賞が決定している。

楽団創立五〇周年を記念して行ったヨーロッパ主要都市公演は、改めて日本のオーケストラのレベルの確かさをアピールし各地で絶賛された。このツアーの最中に「アーツプラン21」の特別支援団体の一つに選ばれたという朗報が入り二重の喜びとなる。採択理由は、長年にわたり音楽監督秋山和慶と共に安定した実力を培い、さらに演奏水準を高めていくこととする意欲的な姿勢と、創立当初より内外の新しい作品に積極的に取り組んでおり、今後一層の活躍が期待されるというもの。

当楽団が創立五〇周年を迎えている今、長

い間地道な努力をしてきたことを認められたということは嬉しいが、その分、責任の重大さに身が引き締まる思いが強い。同時に当楽団にとってこの決定が今後の活動への大きな発奮材料となり、とりあえず、平成九年度の主なる自主事業としては四月の定期演奏会にはロシアの近代作品の中からシュニートケの《ピアノと弦楽オーケストラのための協奏曲》をスタートとして、九月には「抽象表現主義時代のシェーンベルク」と銘打って《ヤコブの梯子》(本邦初演、一月にはヤナーチェクの代表作である《利口な女狐の物語》)をチェコ国民歌劇場から主役級の歌手陣を招聘し、エコ語の原語によるコンサートなど、今まで以上の意欲作にチャレンジしたい。

私自身、長年にわたって各方面に對して文化芸術の発展に微力ながら一身を捧げてきた関係者の一人として、最近焦りと諦めの境地に至りつつあったのだが、「アーツプラン21」の発表は初めてといつていい程の起死回生の一打であった。平成九年秋にオープンする新国立劇場も含めて、今後における日本の文化政策に多大な期待をするのは私だけではなからう。二一世紀に向かって「文化立国」が実現することを期待しつつ、来年度予算の内示を前に固唾をのんで見守っているというのが今の心境なのである。

「アートプラン21」は、平成八年度の文化庁の新規施策として創設された芸術創造活動に対する支援システムである。

平成七年七月、文化庁長官の私的諮問機関である文化政策推進会議の報告『新しい文化立国をめざして—文化振興のための当面の重点施策について—』は、二一世紀に向けた新しい文化立国をめざして文化基盤を抜本的に整備することを求めており、特に芸術創造の活性化に関しては、我が国における現在の活動基盤が極めて不安定な状況にあると指摘し、それを支える安定した創造環境を充実整備していくことが不可欠である旨、提言している。

一、公的機関による芸術創造活動に対する支援

■国による支援

(1)アートプラン21

—新たな芸術活動支援施策—

「アートプラン21」は、平成八年度の文化庁の新規施策として創設された芸術創造活動に対する支援システムである。

平成七年七月、文化庁長官の私的諮問機関である文化政策推進会議の報告『新しい文化立国をめざして—文化振興のための当面の重点施策について—』は、二一世紀に向けた新しい文化立国をめざして文化基盤を抜本的に整備することを求めており、特に芸術創造の活性化に関しては、我が国における現在の活動基盤が極めて不安定な状況にあると指摘し、それを支える安定した創造環境を充実整備していくことが不可欠である旨、提言している。

解説

芸術創造活動に対する

支援について

芸術文化課支援推進室

「アートプラン21」は、この提言に応え、文化庁の従来の芸術創造活動に対する支援事業を再編成して創設したもので、これによりおよそ五割増の大幅な予算の拡大が実現し、二一世紀へ向けた文化基盤整備に大きな一歩を踏み出した（七年度二億二億一、六〇〇万円↓八年度三億六〇〇万円）。このシステムは、次の四つの事業で構成されている。

①芸術創造特別支援事業

意欲的な芸術創造活動への取り組みにより、オーケストラやオペラ、バレエ、演劇など我が国舞台芸術の水準向上の牽引力となることが期待される芸術団体に対する重点的に支援するもので、その対象となる活動は年間の自主的な公演活動全般にわたり、かつ継続的（原則として三年間）な支援を行う。これまでの支援が一つひとつの公演を対象とし、かつ単年度であったのに対し、「特別支援事業」は、年間の自主公演活動を総合的にしかも継続して支援する点に

②国際芸術交流推進事業

国際的な芸術交流を進め、新たな世界文化の創造に貢献するため、海外フェスティバルへの参加や二国間の芸術交流など芸術団体による海外公演を支援するものである。平成八年度は、音楽五公演、舞踊七公演、演劇八公演の合計二〇公演が採択された。

③芸術創造基盤整備事業

我が国の次代の芸術界を担う若手芸術家の養成・研修や調査研究など、芸術各分野の全国的な統括団体を実施する芸術創造のソフト基盤を整備する活動を支援するものである。平成八年度は、人材養成事業一七事業、調査研究事業一二事業の合計二九事

特別支援団体の紹介

アゴラ企画・青年団

青年団主宰、こまばアゴラ劇場支配人

平田オリザ



青

青年団は、一九八三年に

結成された若い劇団です。私たちは、新しい言文一致体を目指す「現代口語演劇理論」と、その実践形態である新しい演劇様式により、現在、大きな注目を集め、また若い世代の演劇人に少なからぬ影響を与えていると自負しています。

／＼と聞き取れ

ないような小さな声で喋る。複数の会話が同時に進行する。役者が観客に背中を向けて喋る。などが、青年団の演劇様式の外見的特徴として劇評などには挙げられておりますが、それらはすべて、これまでの演劇理論を批判的に見直し、日本人の生活を起点に、いまま

度、劇的な空間を再構成していくという意識的な戦略に基づくものです。青年団は、派手なアイデアやこけおどしではなく、明晰確固とした理論に基づいた舞台作りの中から、演劇の枠組みそのものを変えようという、新しい表現を作り上げていきたいと考えています。さて、劇団青年団と、それを支える法人で

ある(例)アゴラ企画ならびに、アゴラ企画が経営するこまばアゴラ劇場は、世界にも類を見ない民間レベルの芸術複合体としての機能を有しています。青年団はこれまで、東京・駒場のこまばアゴラ劇場をフランチャイズとして、小空間ならではの作品を作り続けると同時に、演劇に関するさまざまな情報を、ここから発信し続けてきました。特に私たちは、この劇場を、単にスペースを貸す空間ではなく、演劇に関わるあらゆる情報とサービスを提供できる「場」と考え、新しい小劇場のあり方を追求してきました。

アゴラ劇場では、貸し劇場以外に独自の企画として、東京以外の地域の劇団を中心に行う「大世紀末演劇展」の開催や、韓国の劇団の東京での公演の招聘やサポートなど、多面的な活動も行ってきます。また、他の都市から東京へ来る劇団の公演のバックアップ、東京の劇団の地方都市公演の情報の提供なども行っています。全国レベル、国際レベルでの演劇情報の発信基地として、青年団アゴラ企画アゴラ劇場はフル回転しています。

こうした地道な活動の積み重ねから、地域の劇団との交流と信頼関係が生まれ、さまざまなレベルでの芸術的な共同作業ができる下地が生まれてきました。

また、青年団は、アゴラ劇場を演劇に関するあらゆる情報交換の場として捉えることで、一見、特殊で個別的に思われがちな自分たち

の作業を、広く一般化、普通化していくようにしているという側面もあります。

一方で、私たち自身が地方に向向き、自分たちの演劇理論をより深く理解してもらうためのワークショップ活動も盛んに展開しています。全国公演の際には、必ず、ワークショップやレクチャーを併設し、旅公演が、単なる巡回興行に終わらないようなシステムを生み出してきました。

このような成果を踏まえて、青年団は今年から、地域劇団との継続した共同製作作業を開始しました。ただの「呼ぶー呼ばれる」という関係を踏み越えて、私と青年団の俳優が現地に長期滞在し、地域の劇団とともに一つのオリジナル作品を作るという作業です。

私たちは、これまで、劇団の公共性、劇場の公共性を視野に置きつつ活動を続けてきました。アゴラ劇場は、おそらく世界で最も小さい「劇場」です。また青年団は、今年の特

特色がある。

平成八年度は、次のように音楽六団体、舞踊四団体、演劇五団体の合計一五団体が採択された。

【音楽】東京交響楽団、東京フィルハーモ

ニー交響楽団、日本フィルハーモ

ニー交響楽団、二期会、藤原歌劇

団、東京混声合唱団

【舞踊】スターダンサーズ・バレエ団、チ

ャイコフスキー記念東京バレエ団

牧阿佐美バレエ団、松山バレエ団

【演劇】アゴラ企画・青年団、木山事務所、

劇団青年座、劇団ブーク、文学座

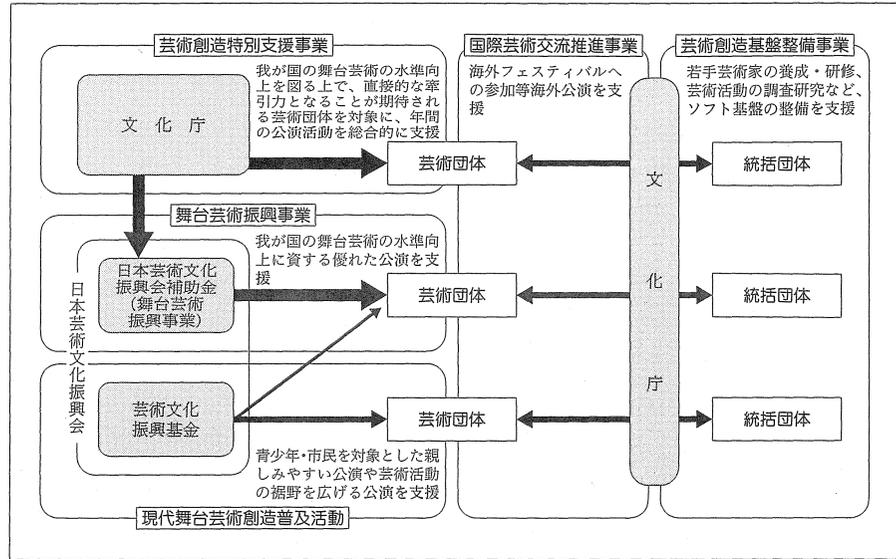
情報プラザ」では、芸術団体と公立文化施設が情報交換を行うことができるよう、芸術団体の公演情報や各地域の公立文化施設の情報を提供している。

⑥芸術鑑賞教室等
文化庁では、優れた舞台芸術を各地域に派遣して、広く国民に鑑賞する機会を提供するため、こども芸術劇場、青少年芸術劇場、中学校芸術鑑賞教室及び移動芸術祭の巡回公演事業を実施している。

⑦税制上の優遇措置
民間の芸術文化活動に対する支援活動のより一層の促進を図るため、税制上の優遇措置が講じられている。

具体的には、公共法人や公益法人等のうち、公益の増進に著しく寄与するものに関しては、特定公益増進法人として認定等を受けたものに対する寄付金について、寄付者が法人の場合一般の損金算入限度額と同額が別枠で損金算入され、個人の場合は寄付金控除の対象となる「特定公益増進法人制度」、公益法人等に対する寄付金で、広く一般に募集され、公益の増進に寄与するための支出で緊急を要するものに充てられることが確実なものとして大蔵大臣が指定したものについては、寄付者が法人の場合全額が損金算入され、個人の場合には寄付金控除の対象となる「指定寄付金制度」

「アーツプラン21」の支援スキーム



などがある。

■芸術文化振興基金による助成事業
「芸術文化振興基金」(平成二年三月に創設)は、芸術文化の振興普及を図る活動に対する支援を行うため、政府出資の五〇〇億円と民間からの寄付金約一一二億円の合計六一二億円を原資として、その運用益をもって芸術文化団体等の活動に対する支援を行っている。

助成対象分野は、「舞台芸術等の活動」、「映画の製作活動」、「地域文化関係の活動」、「文化財関係の活動」と大きく四つに分けられ、平成七年度度の支援実績は七七一件、助成金額は総額二〇億七、八〇〇万円となっている。

■地方自治体による支援
近年の心の豊かさを求める国民の意識が高まるなかで、地方自治体においても芸術文化に対する積極的な取り組みが行われている。

都道府県・市町村が支出した芸術文化経費は、平成六年度で七、四四三億円となっており、この一〇年で約三倍の伸びを示している。

特に、地域の文化振興の拠点となる舞台芸術のためのホールを持つ文化会館の整備は積極的に進められており、平成五年度時点で、地方自治体設置による施設(固定席数三〇〇席以上)は、一、一一六施設を数えている。

また、地方自治体における芸術文化振興等

業が採択された。

④舞台芸術振興事業
日本芸術文化振興会(芸術文化振興基金)に対する補助金を新たに創設し、創作性の高い優れた国内公演を公演単位で支援するものである。平成八年度は、音楽二公演、舞踊一〇公演、演劇三二公演の合計六四公演が採択された。

②その他の国の支援
以上のような「アーツプラン21」による芸術創造活動に対する支援のほか、国では、次のようなさまざまな支援を展開している。

①人材養成
文化庁では、若手芸術家を海外に派遣し、実際の研修の機会を提供する「芸術家在外研修」(国内での研修を行う「芸術インターンシップ」、海外から有望

若手芸術家を招へいして研修・交流を行う「海外芸術家招へい研修」を実施している。

②顕彰
優れた業績を上げた芸術家等の功績をたたえ、顕彰するため、「文化勲章」「文化功労者」「日本芸術院」「芸術選奨」「芸術作品賞」「優秀映画作品賞」「創作奨励賞」などの制度が設けられている。

③発表の場の提供など
文化庁では、昭和二年以来、毎年秋に「芸術祭」を開催し、意欲的な創造活動の成果の発表の場を設け、優れた成果に対しては、芸術祭大賞などを授与している。

④創造活動の場となる文化施設整備
文化庁では、伝統芸能の公開、伝承者の育成等を行う国立劇場や、国立美術館・博物館、フィルムセンターなど各種文化施設を整備している。また、平成九年秋の開場をめざして、オペラ、バレエ、演劇などの現代舞台芸術の振興の拠点である新国立劇場の整備を進めている。

⑤情報の提供
文化庁では、情報化の進展に伴い、文化に関する総合的な情報発信を行うための基盤として、「文化情報総合システム」(文化財情報システム・美術情報システム、地域文化情報システム及び現代舞台芸術情報システム)の整備を進めている。また、「芸術

のための基金の設置なども進んでいる。平成六年度時点で、四一の都道府県において六〇、一〇の政令指定都市において一三の基金等が設けられており、さまざまな活動に対する支援が行われている。

二、民間による芸術創造活動支援
以上のような公的支援のほか、民間企業等においても、芸術文化活動を支援するなどの、いわゆるメセナ活動が行われている。

民間企業が基本財産を出資し、さまざまな芸術文化活動に対し助成を行ういわゆる助成型財団は近年増加している。昭和六三年には、助成型財団による芸術文化助成財団協議会が発足し、現在、二二の財団が加盟している。

平成二年には、社団法人企業メセナ協議会が設立され、企業相互の情報交換を行うとともに、同協議会が認定した芸術文化団体の活動に対する寄付金には税制上の優遇措置が適用されることとなっている。

また、最近では、メセナ活動を実施する企業が首都圏から地方へ、大企業から中小企業へと拡がりをみせる傾向にある。地域レベルでのメセナ活動の活性化を反映して、平成八年三月には、各地のメセナ組織相互の交流、情報交換、協力を図るための「全国メセナ組織連絡会」も発足している。

編集後記

日本の端のN県（今は昔、江戸時代には日本で唯一、海外の文化を取り入れることができた県。）から文化庁に6か月間の研修生として意気揚々と赴任しましたが、その任期も残すところあと数日となりました。今まで「文化行政」に携わった経験はなく、見るもの聞くものすべて新鮮なものばかり。おおよそ普段の生活で「文化」というものに縁遠い自分が、はじめて「文化」というものを考える機会を得たのだから「少しは、文化人になろう。」と思っていました。ところがすぐに「文化」とは何か、「美術館」と「博物館」の違いは、等々こたえられないことばかり。揚げ句のはては、「文化立国21」「ミュージアムプラン」という新規事業に対する外部からの問い合わせにおおろし、結局何一つわからずじまい。（忙しさにかまけて勉強することを怠っただけですが。）

この経験を踏まえ、県に戻ってもう一度「文化」についてじっくりと自分なりの答えを見つけてみたいと思っています。文化庁のみなさん、ご迷惑をおかけしました。（AG）

文化庁月報 11月号 (通巻338号)

平成8年11月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

振替口座 00190-0-161

印刷所—(株)行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価530円（本体515円）送料76円

年間購読料6360円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株)ぎょうせい営業第一課宣伝係

電話03(5349)6657 (ダイヤルイン)

©1996 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。